はじめに

早いもので、初めて書いた新書『日本人の英語』（岩波新書）が出版されてから、30年のときが流れた。私が日本語を学びながら、そして、大学で英語を教えながら気づいたことについて記したこの書は、幸い絶版にならずに、これまで読み継がれてきた。

それから現在まで、「一般の日本人の英語はどう変わってきたのか？」という質問を折りに触れて受けてきた。答えようと思っても単純には片付けられない問題だから、それについて何か発言するとなると複雑な気持ちになるが、私が授業で接する学生の英語力から判断すると、次のことが言えると思う。

- 確かに30年前に比べると、現在の日本人の若者のほうが英語の音に対して敏感になってきていて、英語の発音と聞き取りはよくなっている。
- 依然として言われることのある「日本人の外国人コンプレックス」という問題も、若い人に限って言えばもはや存在しないようだ。
- 以前であれば教室でよく見られた、恥ずかしいのと間違いを恐れる気持ちから、沈黙が続くという

光景もなくなった。むしろ、積極的に「喋(しゃべ)ってみたい」という学生が増えている。

◆その代わり、文法を学ぶ時間は減っているため、基本的な文法の理解力が落ちてきている。

◆また、非常にもったいないことに、英文を読む習慣が減り、中学・高校で使われている英語教科書に載っている英文も必要以上にシンプルになってきている。単純化された英語にしか触れていないことで、読解力がずいぶん下がっている。

◆30年くらい前から萌芽が見られた「語彙(ごい)の貧困」という問題は、一層深刻になっている。

最後の二つの問題に関しては、技術の進歩の影響も受け、30年前に比べて本を読む量が大幅に減った「いまどきの若者」の「日本語の国語力」についても似たようなことが言えるのだから、ある意味仕方がないことなのかもしれない。

逆説的だが、「語彙の貧困」という現象は、本物の英語を身につけたい方にとっては、ヒントになるはずだ。結局、説得力のある英語を話したり書いたりするためには、たくさんの語彙が必要であり、それを自分のものにするには、可能な限り多くの英文を読み、それを消化し、自分のものにするという地道な努力を続けるしかないのだから。

以前から繰り返し言っていることだが、私は現在の日本のように国民全員に一つの外国語を覚えさせることは無理があると考える。語学学習は本人の自発的努力しかない。義務教育として、無理矢理英語を教えて、思うように目標を達成できないのは当然ではないだろうか。

だが、何といっても、いまどきの若者の「人間性の良さ」は、30年前も今も一切変わっていない。「先進国の中で英語がいちばん不得意」かもしれないが、人間性にはなんの問題もない。日本は幸せな国だと身にしみて感じることも多い。

私は2017年3月に、31年間勤めた明治大学を定年退職となった。現在、非常にありがたいことに、私は再就職先として金沢星稜大学に声をかけていただき、人文学部で英語を教えている。新しい学部なので、まだ比較的小規模ではあるが、そのおかげで、学生各自の個人指導を細かいところまでできる。温かく気持ちのいい環境で仕事ができて、とても幸運に感じている。

担当科目は、私がいちばん“得意”とする（つもりの）英語の「ライティング・スキル」と「英文法」が主である。日本人にこの二つの科目を教えるとなると、どうしても「冠詞と数」「時制」「仮定法」「関係詞節」「因果関係の表現」「前置詞の使い方」という「用法」を

メインテーマにする必要がある。私がこれまで書いた本のテーマもそのほとんどがそれらの「用法」に焦点を当てたものだった。

それに対して、本書では、これまで取り上げるゆとりがなかった「語彙の問題」を中心とした。これも一般の日本人英語学習者にとって実に重要なテーマだと思っている。語彙の正しい理解は、読解だけでなく、正しく話したり、書いたりするときにも必要不可欠なことは言うまでもないだろう。

本書では、語彙の問題以外に、これまでの私の著作と同様に、英語と日本語を話す人が自分の考えや思いを伝えるときの「心の細やかな動き」についても考えてみたつもりだ。手に取ってくれた方が、英語と日本語という二つの言語に限らず、言葉に対する意識をこれまでより少しでも強くもってくれたらうれしい。

目次

はじめに 3

1 diversityが表す多様な世界 12

variety か diversity か？／企業が目指す多様性とは？／ケネディ大統領が目指した多様性／黒人同士の暴力を歌うソウルの名曲／アメリカ社会の二極化を憂える歌

2 「原子力問題」を考察する 22

「放射線」と「放射能」の違い、分かりますか？／「核」と「脱原発問題」／サダム・フセインが英語に与えた影響／the mother of の本来の意味／原発の再稼働問題を考える／「問題」に当たる英語に関する問題

3 性と愛をめぐる英語表現 37

初めての性的ユーモア／気持ちの悪い I love you. ／lover は恋人ではない？／ジャズ・スタンダードで学ぶ恋／コール・ポーターの巧みな押韻／「人」を表す love ／ロバート・バーンズの名詩

4 英語に見る「老人力」への意識 51

英語で「力」をどう表すか？／英語の-ism を考える／高齢者への蔑称から学ぶ教訓／老人を表す様々な英語／婉曲的でも受け入れがたい「老い」

5 英語に訳せない小津映画の巧妙なセリフ 61

『秋刀魚の味』の巧妙なセリフ／「色気」をめぐる誤訳／深い味のある「いい塩梅に」／不定冠詞 a がもつ論理／強調の定冠詞 the／アイロニーと反語的表現／品のない英語を考える／誤訳だらけの慣用表現

6 「第3の場所」の役割を果たす本屋の力 78

出会いを求めて集まる場所／夢の「神田古書店街」／第３の場所の特質／動詞の welcome を使いこなす／通風持ちを「誘惑する」英語／油っこい語感をもつ英語

7 「資本主義の走狗」の英訳の不可思議さ 87

毛沢東による批判のコミカルな英訳／capitalism の語源を考える／資本主義と大恐慌／ある農民のすさまじい体験

8 『こころ』の文体に見られる英語の影響 101

単純には訳せない『こころ』と「先生」／繰り返しの多い英語的な文体／「私の自信を傷めた」への違和感／ rather than ～を思い出させる表現／英語では出せない感覚／英語の時制が理解できる『こころ』の英訳／日本人の英語に存在しない過去完了／マクレランの選択を考える

9　英語の語彙に定着したtsunami　116
tsunamiが英語になったのはいつか？／tsunamiを使う悪趣味な現象／地震に関する様々な英単語／ベッシー・スミスの歌う大洪水／ミシシッピ大洪水を歌うブルース／ハリケーン・カトリーナの悲哀を歌う

10　日本語の人間味あふれる擬態語世界　128
「家」をどう英語に訳すか？／「ピリピリ」しているのは誰か？／「おっとり」との出会い／「ぷにぷに」か「ぷにゅぷにゅ」か／英語の擬音語を考える／「ちっちゃなクモさん」を表す擬態語／「子ども向き」ではない擬態語

11　英語と日本語の世代間ギャップを考える　139
ベビー・ブーマー世代の憤り／Lost Generationは「失われた世代」か？／被害者イメージのないジェネレーションX／混同される現在分詞と過去分詞／電子辞書のすすめ

12　『細雪』と*The Makioka Sisters*　149
英語で読んだ『細雪』／サイデンステッカーの英訳を読む／英語のタイトルにはできない細雪／英訳から学ぶ疑問文のニュアンスの違い

13 死を表すおすすめの婉曲表現　159
「臨終」という言葉への違和感／away と on の微妙な違い／over を使った不気味な表現／E・E・カミングスの死についての詩／バッファロー・ビルとは何者か？　アメリカ人にとって「種馬」のイメージとは？／死神がやってくる

あとがき　172

1　diversityが表す多様な世界

It is time for parents to teach young people early on that in diversity there is beauty and there is strength.
　—— Maya Angelou

多様性には美しさと力がある、と早い段階で親たちが若者たちに教えるべき時が来ました。
　—— マヤ・アンジェルー

How can you govern a country which has 246 varieties of cheese?
　—— Charles de Gaulle

246種類ものチーズがある国をどのように治めるというのですか？
　—— シャルル・ド・ゴール

---

varietyかdiversityか？

「多様性」を英語で表現するには、たいてい**variety**か**diversity**が用いられる。この2語の意味は基本的に同じだが、語感とニュアンスは微妙に違う。

　まず、語感としては、**variety**のほうが軽く、「日常的」な言い方になる。たとえば、アイスクリームに31もの味があるというような話なら、

All Baskin-Robbins shops sell ice cream in a **wide variety** of flavors.

（バスキン・ロビンスの店はどこも**多種多様**な味のアイスクリームを売っている）

のように、**variety**を用いた言い方が自然だが、同じ内容でも“a large **diversity** of flavors”とはふつう言わない。これは、**diversity**という語は重みがありすぎてこの場面にはそぐわない感じがするからだ。また、ニュアンス的にも合わないところがある。

具体的に言うと、「選択肢の幅広さ」が強調される感じの**variety**に対して、**diversity**は「各種のそれぞれの相違点そのもの」が強調されているようなニュアンスがあるのだ。

また、これとは対照的なことに、厳格なポリティカル・コレクトネス（political correctness, PC）の世界では、diversityを使うことが圧倒的に多い。

具体的なケースを挙げると、たとえば、ワシントン州のある大学の医学部では、アメリカ西海岸出身の東洋系の学生が大半を占め、東海岸出身のヒスパニック系の学生は一人もいないとする。そこで、大学は受験者の中から、無理にでも東海岸出身のヒスパニック系の者を探し出し、合格させる。その結果として、受かるはずだった西海岸出身の東洋系の受験生が一人落とされることになるかもしれないが、医学部の**student**

diversity（**学生の多様性**）は高まる。そこで、大学側は、

> In order to provide a rich educational environment, **student diversity** is especially important.
> （豊かな教育環境を提供するためには、**学生の多様性は**特に重要である）

などのように主張するかもしれない。

この医学部のようにアメリカの大学では、学生の「多様性」を高めるために、「特別選考枠」を設けることがよくある。入学試験の総得点からすれば明らかに不合格のはずの受験生Ａを「合格」とし、受験生Ａよりはるかに高得点を取った受験生Ｂを「不合格」とする、というようなことが少なくないが、この措置が目指すものはstudent **diversity**と言い、student **variety**とは言わない。

このような「積極的差別是正措置」（affirmative action）を表現する場合には、「重みがあり、各種のそれぞれの相違点そのもの」が強調される感じのdiversityという語がぴったりだが、「31種類の味が揃(そろ)っている」というアイスクリーム屋の広告にふさわしいvarietyは、そぐわないのである。

企業が目指す多様性とは？

この20年間、アメリカの大企業がdiversityという言

葉を標語として使うことが極めて多くなってきた。むろん、様々な製品の生産（product diversity）や、多角的な投資（investment diversity）などに関して使うことが依然としてよくあるが、それよりもdiversity in the workplace（職場での人間の多様性）の素晴らしさを強調するために使うことが目立つようになっている。diversity in the workplaceの話になると、

racial diversity（人種的多様性）
ethnic diversity（民族的多様性）
age diversity（年齢の多様性）
gender diversity（性別の多様性）
sexual-orientation diversity（性的指向多様性）

などが主な例となる。

考えてみれば、gender diversityは、「多様性」ではなく、「二様性」の話だから、かなり変な言い方である。また、sexual-orientation diversityに関しても、考え方によっては「異性」と「同性」しかないはずだ、と文句をつけたくなる人もいるかもしれない。しかし実際のところ、人間の「性的指向」は数え切れないほど多様なので、文句のつけようのない言い方ではある。

熱帯雨林などの大自然に見られるbiodiversity（生物多様性）とは違って、アメリカの職場や大学に見られるdiversityは、理論上では理想的な有り様かもしれないが、実際には不安定な状態になりやすい。地政学

的なレベルでも、世界各国の政治的・思想的・宗教的diversityが戦争の原因になってしまうこともある。

ケネディ大統領が目指した多様性

1917年にウィルソン大統領は、アメリカの第一次世界大戦への参戦の必要性について、

> The world must be made safe for democracy.
> （世界は、民主主義を許容できなければいけない）

と言った。冷戦中の1963年には、ケネディ大統領がもう少し寛容な姿勢を示し、この言葉を借りて、

> ... if we cannot end now our differences, at least we can help make the world safe for diversity.
> （今は、お互いの相違点をなくせないかもしれませんが、少なくとも、世界が多様性を許容できるようにすることはできます）

と言った。

これは、ケネディ大統領がダラスで暗殺される約5カ月前の6月10日に行われた、アメリカン大学の卒業式での演説にあった言葉だ。その続きは次の通りである。

> For, in the final analysis, our most basic common link is that we all inhabit this small planet. We all breathe the same air. We all cherish our children's futures. And we are all mortal.

（というのも、最終的には、我々人間の最も基本的な共通点は、みなこの小さな惑星に住んでいるということです。みな同じ空気を吸っています。誰もが自分の子どもの将来を大切に思っています。そして、誰もがいずれは死んでいく身なのです）

黒人同士の暴力を歌うソウルの名曲

上記の演説の約２カ月半後に、キング牧師があの「I Have a Dream演説」で人種平等を主張した。しかし、あれから50年以上経っても、人種差別が依然としてアメリカの最も深刻な社会問題だ。バラク・オバマが黒人初の大統領になってもなかなか改善されなかった、複雑な問題である。

問題の深刻さを端的に表すものとして、アメリカのトーク番組などで黒人に対する差別が論じられるときによく出てくる「black-on-black violent crime（黒人同士の暴力犯罪）がかなり多い」という論調がある。

簡単に言えば、「黒人文化」自体にも問題があるのでは、との指摘なのだが、そもそも黒人同士の暴力犯罪率に関する確かな統計が少なく、また、信憑性（しんぴょう）のありそうな統計にしても、いろいろな社会的解釈ができるので、結局その現象の意義についてはこれといった結論は出ない。

私がblack-on-black violent crimeを初めて意識した

のは、高校３年生の頃である。ソウル・ミュージックの女王アレサ・フランクリン（Aretha Franklin）が歌う“Take a Look”（「ちゃんと見てみな」／作詞・作曲：クライド・オーティス〈Clyde Otis〉／1964年）という曲を聴いたときだ。次の歌詞が特に印象的であった。

> Brothers fight brothers, and sisters wink their eyes, while silver tongues bear fruits of poison lies.

この英語を自然な日本語に訳すことは非常に難しいのだが、強（し）いて言えば「黒人の男は自分たち同士で争い、黒人の女たちはそれを面白半分に見逃す。その上、口だけ達者な奴らは毒の嘘をつきやがる」といったところだろう。

アメリカの黒人は、よく“He’s a **brother**.”（彼は同じ黒人だ）や“She’s a **sister**.”（彼女は同じ黒人だ）のように、人種的仲間意識をbrotherとsisterを使って表す。

ここでの“**Brothers** fight **brothers**”は、ギャングのdrive-by shootings（走行中の車からの銃撃）などのblack-on-black violent crimeを示している。そうした男性たちの争いを見ている黒人の女性たちがwink their eyes（ウィンクする）という表現は、wink at ～（～を咎（とが）めずにおく、見て見ぬ振りをする、見逃してやる）という意味を表しながら、何か面白いことに気

づいたとき相手に「意味ありげなウィンクをする」という意味もほのめかしている。

また、silver tongues（雄弁家）はここで「口だけ達者な政治家たち」のことを皮肉っている。

これは「私たちはなぜ一つになって非暴力による抵抗を中心とする公民権運動に参加できないのか」とblack-on-black violent crimeを悲劇として見ている歌なのである。その後の歌詞には、「I Have a Dream演説」を間接的に引き合いに出す次の言葉がある。

> What's happening to your precious **dream**?
> It's washing away on a bloody, bloody **stream**.
> （あの大切な**夢**はいったいどうなっている？　血に染まってしまった**川**に押し流されているではないか）

dreamとstreamが韻を踏んでいることにも注意してほしい。

アメリカ社会の二極化を憂える歌

これまではラヴ・ソングがほとんどだったソウル・ミュージックの歌詞に、社会的意識が幅広く見られるようになったのは、1971年にリリースされたマーヴィン・ゲイ（Marvin Gaye）の“What's Going On”（「今起こっていること」／作詞・作曲：アル・クリーブランド〈Al Cleveland〉、マーヴィン・ゲイ、レナルド・ベ

ンソン〈Renald Benson〉）という曲からである。

この歌のテーマは人種差別ではなく、ベトナム反戦運動とその戦争によるアメリカ社会の二極化だった。“What's Going On”は、まず、ベトナム戦争で息子を失ってしまって泣いているアメリカの**母たち**が多すぎる、と嘆じる、

> **Mother**, **mother**, there's too many of you crying.
> （お母さん、お母さん、泣いているお母さんたちが多すぎる）

という歌詞から始まる。また、歌のその後では、戦争の拡大は無意味だと主張しながら、その拡大を助長しているのは徴兵される心配のないアメリカの**中高年男性**ばかりだと、**father**という語を使って指摘する、

> Father, father, we don't need to escalate.
> （父さん、父さん、戦争を拡大する必要はないよ）

というシンプルな歌詞も効果的である。

なお、当時目立っていたgeneration gap（世代の断絶）に触れる次の歌詞もある。

> ... who are they to judge us simply 'cause our hair is long?
> （たかが髪が長いからといって、僕らを非難する権利があいつらにはあるのか?）

ベビーブーム世代の若者によって人口が急増し、その世代のシンボルだった男性の長髪は、上の世代にと

ってショッキングなファッションだった。社会的ルールの破壊の象徴でもあったのだ。しかし、髪の長さを非難している大人たちが、数えきれないほど多くのベトナム人を殺しているアメリカ軍を黙認するなんて、価値観の基準はいったいどこにあるんだ、と主張する歌詞だ。

“What’s Going On”は、最後に、アメリカ社会の二極化をどうにか和(やわ)らげなければいけないという気持ちを、

> We’ve got to find a way to bring some understanding here today.
>
> （もう、互いに理解できるようになる方法を何とか見つけなければならないのだ）

と表現する（wayとtodayが韻を踏んでいる）。

多様性があるがゆえに、分裂の危険といつも背中合わせのアメリカを象徴する曲だと言えるかもしれない。

英語のこころ
マーク・ピーターセン・著

発　行：集英社インターナショナル（発売 集英社）
定　価：700 円（本体）＋税
発売日：2018 年 4 月 6 日
ISBN：978-4-7976-8024-9 C0282

ウェブでのご予約・ご注文は こちらにどうぞ！